

樽流俳句選抄（春季雑詠）

選者 今津大天 先生

佳作

春祭り氏神様へ無事を謝す	寺田登仙
廃校の庭記念樹の桜散る	舟坂如月
街灯に忍ぶが如き猫の夫	大久保大四
ケキムケキムと春告げ鳥の声や	波多野妙生
畑仕事春光浴びて腰延ばし	高橋照笑
舞い落ちて淀みの渦に花筏	畑佐楽人
彼岸会や久しくわびて花供える	国枝紫陽
熱気溢る裸祭りの厄払い	二村秀香
懐かしや一年生のはずむ声	額綱久峰
名も知らぬ草にも春の兆しかな	加藤晴月
子を二ひき連れて母熊穴を出る	畑佐美泉
独り居となりし友の家土雛	高島恵水
妻逝きて一人淋しく春炬燵	林 巴城
若鮎の漣上待ちわび釣り天狗	亀山文月
当選の万歳響く春の宵	岩田紀正
月朧妊娠告げる電話来る	柴田文花
夕日背に麦踏む農夫影長し	服部利水
咲き誇る藤房長さ曼陀羅寺	井戸幸女

七客

菜畑に引きも切らない巡礼歌	天野桂花
啓蟄や八十路の爺が鋤磨く	岩田華泉
保育所に泣く児燥ぐ児四月尽	永縄一紅
夫の忌へ老舗の味の草団子	杉山多美
弁柄の街並ばかすおぼろ月	早津郁男
花冷えに一枚羽織る旅の空	野田春香
ゆじくりと薫くず動く春の川	亀山則天

三光

三人位

黙々と耳疎き身で畑を打つ 柴田小舟

「評」年を重ねるといろいろ不都合が生じて、その一つが「耳が遠くなる」「目が疎くなる」など、感覚器官に関することであろうか。これ、外見からは分からないことで、一人で悩むと、ことが多い。しかし、日常生活に大きな支障は立派に「畑を打つ」ことができる。

一人位

花びらの色より淡し妻の爪 谷藤尚花

「評」「花」は他の植物や季物なしで使えば、諧では「桜」を指すから、この句は奥さんの色が桜の花びらより薄いと云っているのだ。ところが奥さんの健康状態を示すのか、たおや、や色いぼさを言っているのかは分からないが、さんに対する思いやりのまなざしが感じ取れている。

選者詠

甦る未来に記憶蜃気楼

大天

（参考：昔のことですが、実は、フラミシド、クならぬフラミシドフヤースとも言うべき、ことが頭の中にはじばじとフラミシドのように現したことがあるのです。実際十分後に全く光景に出会いました。たぶん、理解されないので余分のことですが書き添えました。）

二人位

春分やすんなり通る針の糸 多和田瑠璃

「評」日も長くなり日射しも強くなりて、針に糸を通しやすくなりたという句である。言っていることは普通のことだが、俳句としては、その「春分」がよく働いているし、「すんなり」の「すんなり」に俳諧味があつてよい。それではなかなか通らなかつたのが、意外や意外「なり」通じたという実感が見事に表現されている。

樽流俳句次号応募要領

- 一、夏季雑詠（ひとり三句）
- 一、締切り令和三年四月末日厳守
- 一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 一、所属社名、雅号名記
- 一、樽流会員変名不可
- 一、投句所 〒504-0934
- 一、各務原市大野町一丁目一二〇番地
- 一、岩田華泉宛
- 一、電〇五八、三八二、七七二五

樗流俳句選抄本（春季雑詠）

梅村 五月

佳作

しみじみと孫の入試で知る速さ 高橋照笑
 静けさやみなうたた寝の置炬燵 御田村光女
 伊那街道車窓にバミと桃の花 畑佐楽人
 愛くるし孫と雛壇祝い酒 二村秀香
 蓮華田を車で廻りて木曾の旅 河村花玉
 酒仕込み終へ古里へ杜氏帰る 服部利水
 露味噌の香り仄かに里の味 井戸幸女
 懐かしや肩車寄せ会ひた桜道 山内澄香
 久し振り地下足袋履いて畑を打 柴田小舟
 地桜の開花を告げる紙面満つ 後藤松月
 散歩道はや蒲公英を見つけたり 長尾伎与子
 参道の花を楽しみ宴の輪 国枝紫陽
 ひとせの辿るは早し初つばめ 永縄一紅
 爛漫の春は津軽の海を越す 青木凡舟
 春光や老いに喜び運びくる 波多野妙生
 お花見の家族が群れる長良川 寺田登仙
 髪切りて春風まとふバスの旅 兼氏佐代子

〈地位〉

パンジーにスマホを向ける古い 岩田華泉
 〈評〉 本年は温かいのでパンジーがいじせいに咲き揃った。
 老人の皆さんもスマホを駆使されるようになした。
 歓声を挙げているのは、「老いの群れ」と断定された点が景となりつつたわじてくる。
 〈天位〉
 わらび狩り携帯電話で話をり 林 巴城
 〈評〉 便利な世の中になした。
 わらび狩りに携帯電話を使い教え合っているのだ。
 「おーい、そちは沢山採れるか」「あんな、白い岩があるあたりにいっぱい生えているのでこちらへ来いよ」と位置を知らせ合っているのだ。
 わらび狩りをするのに携帯電話を使用した例をはじめて知した。
 山盛りになりたわらびの束を見せ合っている光景が浮かんでくる。

振りあげし筍産毛の光けり 岩間芳子
 山裾に田園風景雉の声 畑佐俊作
 散歩道イヌフグリ咲き杖遊ぶ 柴田文花

七客

花吹雪格子戸すかし紙帳場 額久峰
 春うらら東坡の句碑の細き文字 加藤晴月
 合羽着て受粉作業の梨畑 村瀬昇竜
 人口の雪のゲレンデ客疎ら 畑佐美泉
 錆鎌を研ぐ小流れの温みけり 吉田亀笑
 墨太きうぐひす餅と菓子処 早津郁夫
 ちぐはぐな難聴会話山笑ふ 波多野寿扇

三光

〈人位〉

席変えてホームの夕餉二月尽 藤井 修
 〈評〉 追記に依れば一昨年妻を亡くされ娘さんの住んでおられる瀬戸市のホームに入所されていると、ホームでの席替えがあつて楽しい夕餉が訪れたのだ。
 席を替えたことと時の過ぎてゆく早さがつたわじてくる。

選者詠

兄よりも弟が勢ふ追儼かな 五月

注意事項

樗流俳句も良吟がつぎつぎと投句されて来て歓びにたえない。
 投句の中には「あ、この句どこかで拝見したぞ」とか「類句に近いな」と言ひた句がありました。
 生活の中に生まれたあくまでも自作の句を投句して下さい。

樗流俳句次号応募要領

一、夏季雑詠（ひとり三句）

一、×切

一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）

一、所属社名、雅号名記

（樗流会員変名不可）

一、投句所 〒504-0934

各務原市大野町1-120

岩田数美

電（058）242-2254番